

3.九州詩画展

機関誌「九州派」第3号によると、1958年12月17日から19日まで、福岡丸善画廊で「九州詩画展」が開かれている。出品者は、九州派会員田部光子、長頼子、小幡英資、菊畑茂久馬、桜井孝身、寺田健一郎、俣野衛、山内重太郎、ほか詩科同人となっている。

先に引用した、板橋謙吉詩集には拙稿も載っており「板橋さんとの初対面は、確か、昭和33年12月に呉服町の丸善画廊で開いた、九州派と詩科同人との詩画展の打ち合わせの会場である、新天町裏のプリンスの二階であったと思う。既に、20年以上の時間が流れ去っているのでその時の出席者の顔ぶれは定かではないが、九州派の何人かと詩科の方が数人来られていたようにぼんやり覚えている。板橋さんと山口要さんがその席に居られたのだけは、何故かその薄ぼやけた記憶の中に残っている」と書いている。

その時の作品の出品形式は、詩人と画家が一人ずつ一組となり、詩の内容にふさわしい画を画家が描いて並べたものと、画家は別にタブローも何点ずつか出品したと思う。筆者は俣野氏と組むことになり、詩意を汲んで、バルミュラの神殿の廃を背景にした、半獣神のペン画を描いたが、他に腐蝕した銅板を貼りつけた、20号位の作品一点を出品した。それは、うずくまった男を緑青の吹いた銅板でかたどったもので「アルジェリアの男」という題名にした。誰方だったか忘れてしまったが、詩人の方がその題名だけをひどく賞めて下さったのを覚えている。当時は、アルジェリア戦争の最中であったから、共感を覚えられるものがあつたのであろう。

筆者と詩料の同人の方達との交遊は、この九州詩画展から始まったのである。この時出品された詩も画もどんなものであつたか殆ど忘れてしまっているが、その会場で始めてお会いした羽田敬二氏の誠実なお人柄の印象だけはどうしたことかはっきりしている。同氏とは21年後、大鶴竣朗氏の詩集出版記念会で再会することができ、それからは何度かお会いする機会があつた。

最近、羽田氏にお会いして、九州詩画展の思い出話をしていた所、羽田氏は同展には、寺田健一郎氏夫人の翠さんの絵を飾り付けの時に見て、その場で「馬と少年」を書かれたことを聞いた。その詩は同氏の第一詩集「未明」の冒頭に納められている。

序でながら、この「未明」は、4年前、織坂幸治氏の編集で上梓され、たもので、筆者の連作版画「白鯨」の中の2点を扉のカットとして使っていただいている。

また、去る11月1日、羽田氏は第二詩集「豊後岡城詩抄」を刊行されたが、これは、同氏自身撮影による、写真入りオールカラーの異色の詩集であるが、或る機縁により、この度は編集ということで協力させていただいた。思えば不思議な因縁である。

「九州詩画展」に戻るが、筆者がこの時抱いた感想は未だに忘れていない。詩人と画家の協力による詩画展は有意義であると思うが、お互いに余りに現代詩、現代絵画について知らなさ過ぎることを痛感した。このまま続けても、仲良し展に過ぎず、これではお互いの創造的深まりは期待できぬということであった。

この詩画展以後は、それなりの理由があったと思うが、やはり両者の作品上の協力関係は遠退いてしまったと筆者は見ている。

言語とイメージの関係は、双方のジャンルに関わる重要な問題であろうと思う。お互いのジャンルに対する理解が積極的に行われたならば、新たな展開も可能であったろうと惜しまれてならない。

結びにかえて

この度の「九州派展」に筆者は「I痕」と題する新作を出品した。これは、T氏から、目の覚める様な作品をとこの励ましを受けた瞬間、青い鮮血の如きものが脳裏に浮かんだが不定形を嫌って模索すること一ヶ月、尖鋭な青い三日月形に辿りついた。

これこそ、九州派の運動を象徴するものと思い、搬入直前、一週間で完成した。

制作中は、詠嘆に流れることを恐れ、ひたすら、厳しい批評であることを心掛けた。

九州派の名の下に、逝ける者、病に斃れた者、傷ついた者がいる。運動自体が青い血を流している。画面に、A_SCAR（傷痕）と書き込んだ。出品に際し、旧作「心経小解」と「無名碑」を加えた。鎮魂と哀惜の意を表するためである。瞑目して、ペンを擱く。

（画家・環抽象絵画協会会員福岡アジア美術協会副会長）